

特別支援学校（聴覚障害）における コミュニケーションと言語に関する 実態調査（経年調査）報告書 【概要版】

本調査において、国語と算数(数学)の各学部の教育課程の調査項目(準ずる・下学年適用・知的代替・自立活動主を回答いただく設問)の分析及び数値の取扱いに適切でない部分があったため、その部分の記載を削除しています。その他の部分についての修正はありません。(令和5年8月)

平成30年10月

(修正 令和5年8月)



独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

はじめに

聴覚障害教育においては、実践を通して培ってきた言語指導法を基盤としながら、保有する聴覚を活用しつつ、視覚情報を適切に用いる等の教育実践を積極的に展開してきましたが、現在も、言語指導や教科指導等をどのように学力向上に結び付けていくのかを課題として実践研究が展開されています。

こうした中においては、人工内耳を装用する幼児児童生徒の増加や、多様なコミュニケーション及び言語の状況に適切に対応し、より効果的に言語指導や教科指導を行うことが重要です。

また、学校現場においては、近年の ICT 機器の進歩に伴い、タブレット PC 等が多く学習場面で活用されており、特別支援学校（聴覚障害）においても、こうした ICT 機器を活用した実践研究が増えつつありますが、言語指導や教科指導の成果の充実を図るためには、幼児児童生徒の実態はもとより、教科等の特色に応じて、教材を効果的に活用した指導を行うことが重要です。

このような状況を背景として、本研究所では、特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部における教材活用やコミュニケーションの実態、コミュニケーションと言語に関する評価の現状を明らかにし、特別支援学校（聴覚障害）の実践に資する資料を提供することが必要と考え、5年毎の経年調査に取り組んでいます。

本報告書概要版では、平成 29 年度に実施した調査データの概要を報告しますので、各学校における取組の参考にしていただければ幸いです。

本報告書のタイトルは、「特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査」となっておりますが、その中で、調査 1「特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査」と調査 2「特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査」を実施しました。

本調査を実施するに当たっては、各教科等で使用しているコミュニケーション手段について、調査用紙に以下の説明を加えました。

聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション

手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの

日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話

筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む。）

キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの

その他：絵カード、身振り、発音サイン等

本調査の概要について

1. 調査の目的

本調査は、以下の2つの調査から構成されています。

調査1：特別支援学校（聴覚障害）における指導法と教材活用に関する現状調査
幼稚部における話し合い活動、小学部から高等部の教科指導等における教材活用
の実態を調査し、学部毎の現状と課題を明らかにする。

調査2：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査
幼児児童生徒の言語やコミュニケーションの評価法等について調査し、現状と課
題を明らかにする。

2. 調査対象

調査対象は、全国特別支援学校（聴覚障害）の教務担当教員、幼稚部から高等部に所属す
る教職経験年数5年以上の教員、学部主事もしくは主任、としました。

3. 調査方法

郵送によるアンケート調査（悉皆調査）

4. 調査対象及び調査時期

調査対象：平成29年度全国特別支援学校実態調査聾学校の部（全国特別支援学校長会）
に掲載されている全国の特別支援学校（聴覚障害）の本校及び分校の計95校
*記述内容は、平成29年5月1日現在の各学校・学部の実態としました。

調査時期：平成29年8月～平成29年10月

5. 回答数

全95校から回答を得ることができました（回収率100%）。教科等毎に得られた回答のう
ち、経験年数や教育課程等の基礎情報に関する未記入のものを除いた調査票を調査の対象と
しました。

調査 1 : 集計結果① (国語)

- 国語において、最も多く使用されているコミュニケーション手段は、手話付きスピーチであり、そのほかには指文字、聴覚口話の順に多く使用されていました。*¹
- すべての学部で、学校に整備されたインターネット環境による Web 情報が活用されていることが分かりました。*²

* 1 国語で使用しているコミュニケーション手段 (複数回答) (数値は%)

	聴覚口話	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	指文字	その他
小学部	60.0	87.1	8.4	38.7	10.3	70.3	22.6
中学部	55.0	87.5	14.2	50.0	4.2	67.5	10.0
高等部	60.6	94.9	6.1	45.5	0.0	73.7	5.1

* 2 国語で活用している教材について

	70%以上が「よく使う」「時々使う」と回答した教材
小学部	“市販のワークブック、漢字ドリル”、日本語指導用教材、“国語辞典、漢和辞典”、手話辞典、ことば絵じてん、図鑑、絵本、写真、カレンダー、絵日記、インターネット上の Web 情報
中学部	“市販のワークブック、漢字ドリル”、“国語辞典、漢和辞典”、手話辞典、写真、インターネット上の Web 情報
高等部	“市販のワークブック、漢字ドリル”、“国語辞典、漢和辞典”、手話辞典、写真、新聞、インターネット上の Web 情報

調査 1 : 集計結果② (算数・数学)

○ 算数・数学において最も多く使用されているコミュニケーション手段は手話付きスピーチであり、そのほかには指文字、聴覚口話が多く使用されていました。*¹

○ 写真・動画・インターネット上の Web 情報などのメディアの活用の傾向は、学部によって違いがありました。*²

* 1 算数・数学で使用しているコミュニケーション手段 (複数回答) (数値は%)

	聴覚口話	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	指文字	その他
小学部	67.1	86.4	9.3	31.4	6.4	63.6	19.3
中学部	56.9	84.5	18.1	37.9	3.4	59.5	4.3
高等部	58.3	88.3	10.7	47.6	1.0	60.2	4.3

* 2 算数・数学で活用している教材について

	「よく使う」「時々使う」と回答した主な教材
小学部	「よく使う」:市販のワークブック (78.6%)、日記・絵日記 (42.0%)、カレンダー (36.7%)、 写真 (人物、場所、活動場面等) (36.6%) 「時々使う」:図鑑 (45.3%)、ことば絵辞典 (44.7%)、 写真 (41.6%) 、絵本 (42.2%)、手話辞典 (39.8%)
中学部	「よく使う」:市販のワークブック (55.2%) 「時々使う」:手話辞典 (57.3%)、紙媒体の国語辞典・漢和辞典 (38.8%)、カレンダー (38.2%)、 動画 (36.6%) 、 写真 (35.1%) 、市販のワークブック (34.3%)
高等部	「よく使う」:市販の問題集 (46.8%) 「時々使う」:手話辞典 (61.6%)、 インターネット上の Web 情報 (49.5%) 、市販の問題集 (45.7%)

調査 1 : 集計結果③ (外国語活動)

- 外国語活動 (小学部) において最も多く使用されているコミュニケーション手段は手話付きスピーチであり、そのほかには聴覚口話、指文字の順に多く使用されていました。*¹
- 多くの学校で「カード教材」や「写真」「インターネット上の Web 情報」などを活用しながら指導している状況であることが分かりました。*²

* 1 外国語活動で使用しているコミュニケーション手段 (複数回答) (数値は%)

聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
64.2	78.0	8.1	35.0	8.9	61.0	25.2

* 2 外国語活動で活用している教材について

	60%以上が「よく使う」「時々使う」と回答した教材
小学部	「カード教材 (85.0%)」、「写真 (81.2%)」、「インターネット上の Web 情報 (70.5%)」、「カレンダー (69.9%)」、「英語ノート 1、2 (60.2%)」

(参考) 手を加えて活用している主な教材

写真 43.1%、英語ノート 35.0%、インターネット上の Web 情報 28.2%、カード教材 24.0%

調査 1 : 集計結果④ (自立活動)

- コミュニケーション手段として手話付きスピーチが最も多く使用されており、そのほかには聴覚口話、指文字が多く使用されていました。*¹
- 幼児児童生徒の実態に応じて、幅広い教材が活用されている状況が分かりました。*²
- 中学部における漢和辞典の活用が半減し、漢字表の活用が大きく減少するなどの傾向が見られました。*²

* 1 自立活動で使用しているコミュニケーション手段 (複数回答) (数値は%)

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
幼稚部	73.3	84.7	2.0	34.7	13.3	61.3	50.0
小学部	64.1	89.4	10.6	34.5	12.2	73.2	24.6
中学部	53.6	82.4	12.8	30.4	4.8	57.6	8.0
高等部	46.0	92.0	12.0	37.0	1.0	63.0	12.0

* 2 自立活動で活用している教材について

	「よく使う」「時々使う」と回答した主な教材
幼稚部	絵カード (89.9%)、写真 (86.4%)、ことば絵じてん (85.7%)、カレンダー (83.1%) 絵本 (73.3%) が挙げられた。活用状況として文字カード (48.3%) や絵カード (38.5%)
小学部	写真 (94.1%)、カレンダー (93.3%)、絵本 (92.8%)、日記・絵日記 (91.2%)、図鑑 (91.2%)、絵カード (88.4%)、市販のワークブック (86.8%)、ことば絵辞典 (86.2%)、手話辞典 (81.9%)
中学部	インターネット上の Web 情報 (88.7%)、市販のワークブック (82.1%) ※前回調査で 100%となっていた「漢和辞典」が 56.1%に半減
高等部	デジタルカメラ (91.8%)、インターネット上の Web 情報 (90.5%)、デジタルビデオカメラ (82.5%)、新聞 (77.6%)、写真 (75.8%)、カレンダー (74.2%)、国語辞典 (73.4%)、手話辞典 (72.7%)、アプリケーション (72.6%) DVD (71.9%)

(参考) 前回調査 (中学部) において自作・加工の割合が高い教材「漢字表」(62.4%→5.4%)

調査 2 : 集計結果⑤ (コミュニケーションと言語)

- 重複障害のある幼児児童生徒が 13.1% (幼稚部) ~25.3% (小学部) の割合で在籍している状況が分かりました。また、人工内耳を装着している幼児児童生徒数が 40.5% (幼稚部) ~17.4% (高等部) の割合で在籍している状況が分かりました。*¹
- 「コミュニケーション手段の選択や使用に学部共通の方針がある」と回答した学部 229 学部のうち、トータルコミュニケーションと回答した学部が一番多く、次いで「手話、手話付きスピーチ」「子どもの実態に応じて」が多い結果となりました。*²

* 1 各学部における学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳装用児数

	学級数	幼児児童生徒数	重複児数	人工内耳装用児数
幼稚部	289	1,038	136 (13.1%)	420 (40.5%)
小学部	639	1,888	479 (25.3%)	588 (31.1%)
中学部	356	1,252	270 (21.6%)	288 (23.0%)
高等部	423	1,516	294 (19.4%)	264 (17.4%)

* 2 コミュニケーション手段の選択や使用に学部共通の方針が「ある」と回答した 229 学部 (73.4%) の内訳

	回答数
聴覚口話、聴覚主導	34 (14.8%)
手話、手話付きスピーチ	62 (27.1%)
キュードスピーチ	3 (1.3%)
トータルコミュニケーション	79 (34.5%)
同時法	5 (2.2%)
子どもの実態に応じて	46 (20.1%)

調査 2 : 集計結果⑥ (コミュニケーションと言語)

- 学部内のコミュニケーション手段は、「教師と幼児児童生徒」「幼児児童生徒間」とともに、手話付きスピーチと聴覚口話が多く使用されていました。^{* 1-1 * 1-2}
- コミュニケーションの状況を把握する評価方法として、語音聴力検査、発音明瞭度検査、聴力測定の順にあげられました。^{* 2}
- 日本語の言語力を把握する評価方法として、「J. COSS 日本語理解テスト」などの市販の検査が、多くの学校で活用されていることが分かりました。^{* 3}

* 1-1 学部内でのコミュニケーション手段の使用状況 (教師と幼児児童生徒) (数値は%)

学部	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	その他
幼稚部	32.8	38.7	2.1	4.1	5.6	16.7
小学部	27.7	38.2	6.1	11.9	5.3	10.8
中学部	27.8	41.4	7.8	15.2	1.9	5.8
高等部	27.6	44.4	5.6	18.5	1.3	2.6

* 1-2 学部内でのコミュニケーション手段の使用状況 (幼児児童生徒間) (数値は%)

学部	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	その他
幼稚部	35.9	37.9	3.9	1.0	4.2	17.0
小学部	29.9	37.5	11.3	5.5	5.2	10.7
中学部	28.9	38.4	15.8	7.0	3.5	6.3
高等部	28.9	45.7	15.2	5.6	2.0	2.5

* 2 コミュニケーションの状況を把握するための評価方法

- ・各学部総数 443 の回答、市販 (310 : 70.0%)、自作 (133 : 30.0%)
- ・評価法として最も多かったのは、語音聴力検査 (語音弁別能検査) (155)、次いで発音明瞭度検査 (145)、聴力検査・聴力測定 (57)

* 3 日本語の言語力の状況を把握するための評価方法

- ・市販・自作の別としては、市販 (91.4%)、自作 (8.6%)
- ・目的としては、実態把握 (55.0%)、指導に活用 (43.0%)、その他 (2.0%)
- ・実施の範囲としては、学部内 (66.7%)、学部を超えて実施 (33.3%)
- ・用いられている評価に関する主なテストや教材は、「絵画語彙発達検査」、「J. COSS 日本語理解テスト」、「読書力診断検査」など

おわりに

聴覚障害教育班 上席総括研究員 横 倉 久

本調査は、特別支援学校（聴覚障害）（以下、聾学校）における幼稚部の話し合い活動及び小学部から高等部までの教科指導等での教材活用の実態を調査し、学部毎の「指導法と教材活用の現状と課題」を明らかにすること、聾学校に在籍する子供の「コミュニケーションと言語」に関する実態調査を通じて、聾学校におけるコミュニケーション手段及び評価等の現状と課題を明らかにすることを意図しました。

これまでも聾学校では、教育実践の場で指導を工夫し、子供の変容を綿密に観察しながら、予測と反省を繰り返し、指導方法を改善してきましたが、今後は、子供の指導に時間をかけつつも、量だけでなく、質をどう高めていくことができるのか、さらに問われていくと言えるでしょう。こうした課題を解決する糸口は言語指導であり、各学校において、日々の指導や授業実践を継承・共有していくことにあります。

このような時代であればこそ、それぞれの学校において継承されてきた聴覚障害教育に関わる知見や新たな教育実践の成果をまとめ、聴覚障害教育を担う教員、とりわけ、新たに聴覚障害教育に携わる教員に、的確な情報を具体的な実践に即してわかりやすく伝え、共有していくことが極めて重要となります。

概要版ではありますが、本調査が、学校現場における取組の一助となることを期待しています。

特別支援学校（聴覚障害）における
コミュニケーションと言語に関する
実態調査（経年調査）報告書
【概要版】

研究体制

平成 29 年度：原田公人（研究代表）、定岡孝治、山本晃、新谷洋介

平成 30 年度：山本晃（研究代表）、横倉久、宇野宏之祐

報告者

横倉久、山本晃、宇野宏之祐

平成30年10月（修正 令和5年8月）

著作 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

発行 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

〒239-8585

神奈川県横須賀市野比5丁目1番1号

TEL：046-839-6803

FAX：046-839-6918

<http://www.nise.go.jp>